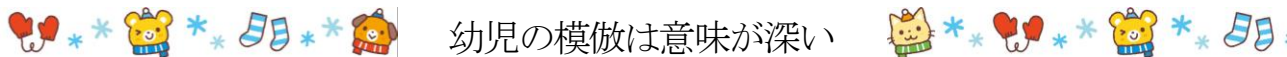


平成 29年 1月 30日

敬愛短大附属幼稚園だより 2月号



幼児の模倣は意味が深い

「園長先生、チャレンジ賞みてください」「チャレンジ賞はいつももらえますか」など1月に入って園児からよくかけられる言葉です。子ども達は3月までになんとかチャレンジ賞をもらいたいと熱心に活動しています。一輪車、あやとり、こままわしなどにとりくんでいます。

「模倣された子どもはより多くの模倣を行い、あまり模倣しない子どもは模倣されることも少ない。模倣の意味は深い」。幼児教育にかかわる講演会でこんな言葉がありました。興味深く聞きました。より多くの模倣する子どもは模倣される子どもではないかと思えます。すぐに、園長室前の花壇でどろだんごづくりに挑戦している5歳児の子ども達とそのまわりにいる3歳児の子ども達のように浮かんできました。5歳児がつくっているのを3歳児の子ども達がじっと見えています。やがて自分も作りはじめます。数人の3歳児と5歳児の子ども達がつくっています。なかなかうまくできません。やがて、5歳児と3歳児が話し合いをしています。

模倣の奥が深いとはどんな意味があるのか考えてみました。模倣する子どもの心の中には、「かっこいい、自分もやってみたい、自分もあなりたい」と思っているのではないのでしょうか。模倣することはその子の主体性に関わることです。だれかが「模倣しなさい」といっても子どもはしません。模倣するという行動を通してその子は主体性を身に付けているのです。大人になっても目標となる人物をめざして努力している人が意欲的に行動していることに関連しています。そして、模倣するだけでは面白くないのです。模倣してできるようになった子どもは自分なりの方法を見つけています。お友だちと全く同じようにしてもどろだんごはうまくつくれません。

そこには自分なりの工夫があるからです。工夫するためには考える力が必要です。「いつもと同じではなく、どうすればよくなるか」、「どうすればもっと早く確実にできるか」など、子ども自身が自分で考え工夫しているのでしょう。まんまるでぴかぴかのどろだんごを宝物のように扱っている5歳児を3歳児はあこがれの目で見えています。園庭で一輪車のチャレンジに挑戦している5歳児をみて同じ5歳児が翌日一輪車の練習をはじめているのもこの模倣と同じだと思います。模倣したいと思う魅力的な人間として目に映るのではないのでしょうか。結果として、3歳児は今すぐ5歳児と同じようにどろだんごをつくれなくてもいいのです。すぐに一輪車にのれなくてもいいのです。大切なことはまわりのことを模倣しよう、興味をもってかかわろうとする態度です。

今回はどろだんご遊びを通して模倣の意味について考えてみました。子どもの育ちは一人一人違います。その子の興味を持つことも異なります。兄弟や姉妹だから同じというわけにはいきません。子どもは一人の人格をもつ人間です。その子の成長にとって模倣する力は生涯に生きる力のもとになります。模倣を通して主体性がそだってほしいと願います。そのためには、まわりの人とのかかわるコミュニケーションの力も必要です。何より重要なのは模倣したいと子どもが感じたり、あんなふうになりたいとあこがれたりする人の存在です。私たちが子どもたちのためにできることは多くあります。(山中 護)

